21. 大腿骨頭壊死における骨シンチと MRI の比較

牧野　直樹　浅井　英彰　伊藤　健吾
児玉　行弘　石垣　武男　佐久間貞行
（名古屋大・放）

1か月以内に骨シンチと MRI を施行することができた特発性大腿骨頭壊死の症例で，両者の診断的意義を検討した．

対象は特発性大腿骨頭壊死 15 症例 21 関節で，股関節 X-P による病期診断に基づき，骨シンチと MRI の所見を比較検討した．

初期例特に超早期例の診断や微細な病変の検出には，MRI は有用であった．初期例では T_1 画像と T_2 画像の解離が多く，T_1 画像は病変を広めに描出する傾向があり MRI の問題点である．骨シンチとの比較からは解離部位は修復機転を中心とする反応部位に一致するようであったが，病変の反応性に関する情報としては骨シンチの方が勝っていた．壊死巣の描出には T_2 画像が鋭敏であった．SPECT 像と骨頭内側下部の状況から，骨シンチによる病期診断の可能性が示唆された．

22. ^{123}I-IMP による肺シンチグラフィー

伊藤　健吾　伊藤　茂樹　牧野　直樹
阿部哲太郎　石垣　武男　佐久間貞行
（名古屋大・放）

N-isopropyl-p-[^{123}I] iodoamphetamine (以下 IMP) の肺集積性を利用して肺シンチグラフィーを行い，その意義について検討した．IMP 3 mCi を急速静注後ダイナミックスタディを行い次にプラナー像，SPECT 像を得た．結果は，1) 正常例においては IMP は初回循環で高率に肺に集積し，以後徐々にクリアーされる，2) 正常例のプラナー像および SPECT 像は ^{99m}Tc-MAA 肺血流シンチのイメージに類似している，3) 疾患例では肺からのクリアランスの低下を示すものがありプラナー像および SPECT 像で ^{99m}Tc-MAA 肺血流シンチとの解離を示すものがある，4) IMP による肺血流シンチグラフィーは肺の非呼吸性機能を反映している可能性があり，それを利用した病態の解明，疾病の早期診断が期待される，であった．

23. IMP-SPECT と脳 RN アンギオの比較

仙田　宏平　中条　正雄　岡江　俊治
嶋田　博　安江　森祐　辻　明
豊吉　久代　（国立名古屋病院・放）

脳血管撮影と X 線 CT により閉塞性脳血管障害と診断された18症例 (性別; 男14例女 4 例，年齢; 57.3±12.0 歳，発症からの期間; 1 か月以内 5 例，6 か月以上 4 例) について，脳 RN アンギオの有用性を直前に施行した IMP-SPECT と比較検討した．

脳 RN アンギオは，IMP-SPECT と比較し，脳血流減少の局在ならびに程度を診断する上で劣っていたが，大血管または比較的太い脳血管の閉塞または狭窄の部位ならびに側副灌流の領域および程度を判定する上に意義があった．他方，他検査で見られた同一虚血巣における IMP 集積低下の程度は，脳 RN アンギオにおける灌流減少の程度が高いほど強く，また側副灌流の程度が高いほど弱くなる傾向を認め，脳 RN アンギオは虚血巣の評価に有用であった．

Presented by Medical*Online